

コーチング・カンファレンスの実施について

小泉卓也*・碓智徳**・伊藤耕作***・畑村学****

Continuous learning practice in Coaching Conference

Takuya KOIZUMI*, Tomonori IKARI**, Kosaku ITO***, Manabu HATAMURA****

Abstract: The coaching conference was aimed at providing a place of continuous learning. As a result, participants brought up knowledge and experience, and experienced the joy and difficulty of deriving the optimum answer at that time. By continuing this activity in the future, My students feel pleasure for learning and I encourage to students the active participation in club activities.

Key words: Coaching, Conference, Self-determination

1. はじめに

現在、学生自身の自ら学ぶ能力が必要不可欠となってきた。その背景には、科学技術の進展により、さまざまな言語や考え方の違う人々との共生があたりまえのように求められ、多様な価値観やものの見方を求められているからである。このような、正解なき時代で求められるのは、マニュアル、暗記している知識の量ではなく、あふれる情報から、自ら学び、見極め、活用できる能力である。

これらの求められる能力は、教育現場において大きな変化をもたらし、アクティブ・ラーニングという言葉をはじめ、学生自ら考えることを求めた授業形態へと変貌しつつある。また、部活動においては、その指導法やコーチング方法について変化が求められている。しかし、現代の正解がなく時代と同様、その指導法やコーチングについても正解がなく、「泥沼」とも表現されている。また、コーチングは複雑かつ動的で、状況環境に依存したプロセスであるとも言われている。このように次に何が起こるか分からず、今日上手くいったことが明日も上手くいくとは限らない状況を切り抜けるには「構造化された即興 (Structured Improvisation)」が必要であり、様々な学びから得られた知識を活用する事が大事であり、学生自ら部活動を運営していく能力を開発していく必要がある。その方法として、日本体育大学大学院コーチング学系でも実施されている、コーチング・カンファレンス¹⁾²⁾³⁾を参考に本校でも同様のカンファ

**** 宇部工業高等専門学校 一般科

レンスを実施した。その活動について報告する。

2. コーチング・カンファレンスについて

コーチング・カンファレンスは、図1に示すように、様々な学びを得ることができる「場」と学年、性別、部活の垣根をこえた「繋がり」を提供する事により、学生たち自らが現代の部活動のあり方から宇部高専の部活動のあり方を考え、自律した部活動運営につなげることを目的とし、2017年8月から実施し、現在までに6回の活動を行った。

学びのコミュニティ



図1 コーチング・カンファレンスについて

3-1. 第1回コーチング・カンファレンス

(西暦2019年1月10日受理)

* 宇部工業高等専門学校 一般科「責任著者」

** 宇部工業高等専門学校 電気工学科

*** 宇部工業高等専門学校 一般科

日時：2017 年 8 月 30 日

場所：宇部工業高等専門学校（小泉研究室）

参加者：0 名

第 1 回コーチング・カンファレンスでは、平成 29 年 6 月 9 日～22 日にかけて、本学の全ての学生に部活動に関するアンケートを実施し、カンファレンスに参加したい意向があった 71 名のうち連絡先を記載している 17 名の学生と各部活動の活動時間に周知を行ったが、参加者が 0 名であった。その原因としては夏期休業期間が影響していたと考えられる。そこで、2 回目のコーチング・カンファレンスは学期内の平日に行うこととした。

3-2. 第 2 回コーチング・カンファレンス

日時：2017 年 10 月 27 日

場所：宇部工業高等専門学校（小泉研究室）

参加者：6 名

1) カンファレンス趣旨説明（図 2）

自分がなれる最高の自分になろう

Never try to be better than someone else.

Learn from others, and try to be the best you can be.

Success is the by-product of that preparation.

他人より良くなるとうとするな。
他人から学び、
自分がなれる最高の自分になろう。
成功はその過程から得られる副産物だ。

John wooden, Basketball Coach



図 2 カンファレンスの趣旨説明

2) 部活動のポジティブな環境

第 2 回コーチング・カンファレンスは、5 つの部活動から 6 名が参加した。図 3 に示したように、部活動でワクワクしている事、そのワクワクを阻害している要因に関して議論を交わした。阻害している要因の多くには、「他者を気にして本心を言えない」、「これを言ったら嫌われてしまうかも」など、人間関係に関することであった。また、カンファレンス後には SNS (Facebook) にて、グループを作成し、カンファレンス開催日以外でも情報の交換や議論ができる環境を整備した。

3-3. 第 3 回コーチング・カンファレンス

日時：2017 年 11 月 30 日

場所：宇部工業高等専門学校（小泉研究室）

参加者：5 名

1) Mindset について

第 3 回コーチング・カンファレンスでは、「Grit-やり抜く力-」⁴⁾、「Mindset-「やればできる」の研究-」⁵⁾を紹介した。その後、図 4 に示すように自分自身のマインドセットについて考え、どうしてそのようなマインドがセットされたのかについて議論を交わした。

グループディスカッション③

いまの部活動でワクワクを阻害している要因は？

- ✓ まず、それぞれが思いつく、部活動でワクワクを阻害する要因をポストイットに書いてください（1 枚にひとつ、何枚書いてもかまいません）。
- ✓ グループ内で出てきた思いを整理してください。

図 3 グループディスカッションテーマ

マインドセットの思考回路

<p>■ 硬直マインドセット</p> <ul style="list-style-type: none"> ・才能は変化しない ・ひたすら自分是有能だと思われたい ～挑戦～ できればチャレンジしたくない ～障害～ 望にぶつかったらすぐにあきらめる ～努力～ 努力は恐ろしい ～批判～ ネガティブな意見は無視する ～他人の成功～ 他人の成功を脅威に感じる 	<p>■ しなやかなマインドセット</p> <ul style="list-style-type: none"> ・才能は伸ばせば伸びる ・ひたすら学び続けたいと思っている ～挑戦～ 新しいことにチャレンジしたい ～障害～ 望にぶつかっても耐える ～努力～ 努力は何かを成るために欠かせない ～批判～ 批判から勇気に学ぶ ～他人の成功～ 他人の成功から学びや気づきを得る
----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------




図 4 マインドセットの思考回路について

マインドセットについて議論した後は、熟達者になるために必要とされている、「10 年ルール」や「1 万時間の法則」について説明した後、それでも能力に差が出て来てしまうことについて図 5 に示したように、デリバレット・プラクティスという観点から議論した。

3-4. 第 4 回コーチング・カンファレンス

日時：2017 年 12 月 22 日

場所：宇部工業高等専門学校（小泉研究室）

参加者：1名

1) 目標設定について

第4回コーチング・カンファレンスは、参加者が1名であったため、図6に示すように、議論したいテーマ設定から行ない、



図5 デリバレット・プラクティスについて

「目標設定は必要か」という問いに対し、目標を持っている人、持っていない人にカテゴリーを分け、目標を持つまでのプロセス、目標を叶えるまでのプロセスについて議論した。



図6 目標設定に関する議論

3-5. 第5回コーチング・カンファレンス

日時 2018年1月17日、18日

場所：宇部工業高等専門学校（マルチメディア学習室）

講師：長嶋淳治氏（日本ゴルフ協会）

参加者：78名

1) リカバリーについて(1月17日) (図7)

2) テーピングについて(1月18日) (図8)

第5回コーチングカンファレンスでは、公益財団法人日本ゴルフ協会 競技者育成担当係長である長嶋淳治氏を招聘し、ア

スレティックセミナーを開催した。本セミナーのテーマは、「スポーツ外傷・障害の予防を目的としたアスレティックトレーニング」と題し、講義と実技を交えた実習形式で催され二日間で78名の学生と8つのクラブ、7名の教職員が参加した。

本セミナー後は、学生会がストレッチポールを購入し、セミナーに参加した学生が、当日に参加できなかった学生に対し、セミナーを実施するという学びのサイクルが実現した。



図7 ストレッチポール実演風景



図8 テーピング実習の実演風景

3-6. 第6回コーチング・カンファレンス

日時 2018年6月15日

場所：宇部工業高等専門学校（小泉研究室）

参加者：1名

1) プロセスを学ぶということ

第6回コーチング・カンファレンスは、プロセスを学ぶということを実践した。図9に示すように、部活動という活動を組織の一部として捉え、宇部高専が目指す人材養成にどのように関わるのか、どのような歯車になりえるのか。その可

能性について議論を交わした⁶⁾。また、図 10 に示したようにそのプロセスを学ぶ手法として PBL (Problem-based Learning) を紹介した⁷⁾。これらの内容は、研究活動を行う上級生には魅力的ではあるが、活動そのものを楽しんでいる下級生に理解を得るには難しい可能性があることが議論を通じて分かった。



図 9 組織的な学習について

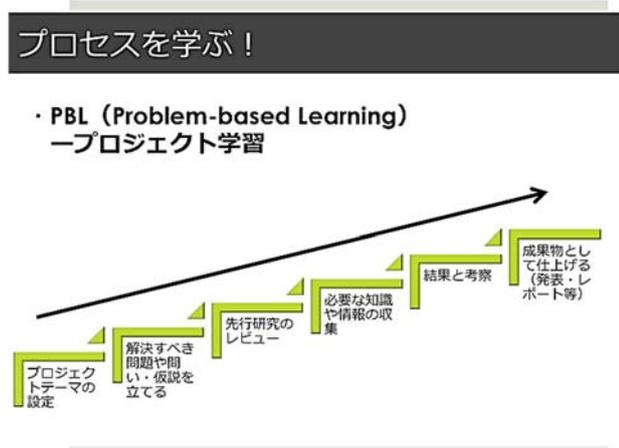


図 10 プロジェクト学習の流れについて

4. まとめ

今回コーチング・カンファレンスを実施することにより、多くの学生と様々なテーマで議論をすることができた。これらの

議論を通じて、正解がない問題に対しても参加者で知識や経験を持ち寄り、その時に最適な答えを導き出す喜びや難しさを体験した。時にはカンファレンス終了時刻から 2 時間が経過したのにも関わらず、議論が白熱したこともあったことから、参加者にとっても有意義なものになったに違いない。当初は、カンファレンスを実施することにより、自律した部活動運営に繋がると期待したが、そこまでの成果を出すことはできなかった。しかし、継続的に学ぶ場を提供し続けることにより、自律した部活動運営の実現に寄与することができる活動だと感じた。今後もこの活動を継続して実施することは、現在のあふれる情報から、自ら学び、見極め、活用できる能力を養うことに繋がるものであり、部活動の活動を見つめ直すきっかけなることを期待している。

参考文献

- 1) 日本体育大学コーチ実践指導力の向上プログラム開発プロジェクトチーム、平成 23 年度文部科学省大学スポーツ研究活動資源活用事業「コーチ実践指導力の向上プログラム開発」報告書。(国際文献社 2012) .
- 2) 日本体育大学コーチ実践指導力の向上プログラム開発・展開プロジェクトチーム、平成 24 年度文部科学省大学スポーツ研究活動資源活用事業「コーチ実践指導力の向上プログラム開発・展開」報告書。(国際文献社 2013) .
- 3) 日本体育大学スポーツコーチの継続的専門能力向上プログラムの開発と展開プロジェクトチーム、平成 25 年度文部科学省大学スポーツ研究活動資源活用事業「スポーツコーチの継続的専門能力向上プログラムの開発と展開」報告書。(国際文献社 2014) .
- 4) アンジェラ・ダックワース (著), 神崎朗子 (翻訳) : 『やり抜く力 GRIT (グリット) —人生のあらゆる成功を決める「究極の能力」を身につける』, ダイアモンド社, 2016.
- 5) キャロル・S・ドゥエック (著), 今西康子 (翻訳) : 『マインドセット「やればできる!」の研究』, 草思社, 2016.
- 6) ピーター・M・センゲ (著), 枝廣淳子, 小田理一郎, 中小路佳代子 (訳) : 『学習する組織 システム思考で未来を創造する』, 英治出版, 2011.
- 7) 溝上慎一, 成田秀夫 : 『アクティブラーニングとしての PBL と探求的な学習』, 東信堂, 2016.